

昨年、コーナーさんは戦時中の日英友好の記念として “The Marquis: A Tale of Syônan-to” という隨筆を出版した。最近、石井美枝子さんによってこれの訳文が出版された（中公新書 1982）。その巻頭に次の文が載っている。

当時をふりかえるたびに、私はいつも次のような詩を想い起します。

‘Of mercy, courage, kindness, mirth.

There is no measure upon earth.

Nay, they wither root and stem

If an end be set to them.’

E. J. H. Corner

昨今戦争の悲惨な思い出の記事が相次いで伝えられ、気の滅入る毎日であったが、それだけにこのさわやかな思い出は私共を強く力づけて呉れるのである。

(国立科学博物館)

○新変種ハハジマノボタン (豊田武司) Takeshi TOYODA: A new variety of *Melastoma tetramerum* Hayata from the Isls. Ogasawara

小笠原のノボタン属植物については、1905年に服部広太郎氏が父島の武田牧場（現在

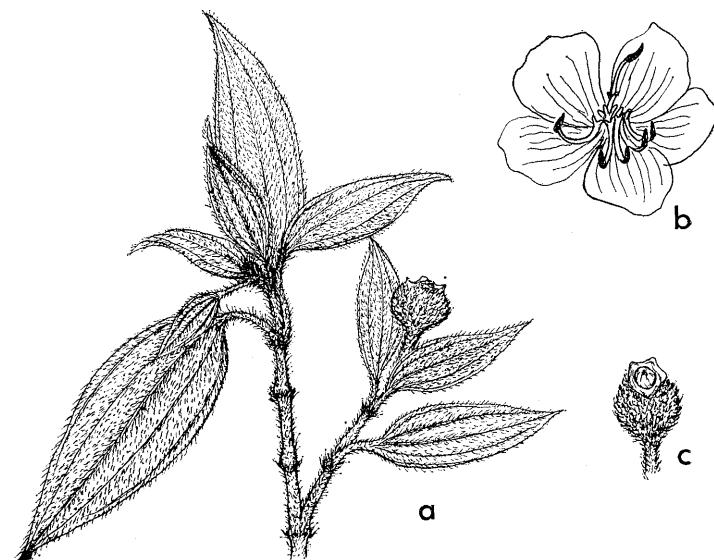


図 1. ハハジマノボタン *Melastoma tetramerum* Hayata var. *pentapetalum* Toyoda.
a. 果実をつけた枝. b. 花. 3. 果実. ×2/3.

の中央山東平）において採集した標本に基づいて、1913年早田文蔵氏が固有種ムニンノボタン (*Melastoma tetramerum* Hayata) として発表した。戦前の文献（豊島怨清、小笠原島国有林植物概況、東京営林局、1929年；林業試験場報告 36: 53, 1938年）によると、その分布地は父島の武田牧場に若干自生するほか、母島と兄島に1~2株が最近（昭和12~13年）になって発見された、と報告されている。

戦後は返還直後の1968年秋から1969年にかけて行われた、自然公園と天然記念物等の調査の際、母島の乳房山南西面と摒岳山頂附近で、群生状になった自生地が確認されたが、戦前自生していた父島においては再発見できなかった。母島で返還後発見されたものはムニンノボタンに似ているが、樹高が大きいものでは4~5mに達し、花は6~7

表 1. ハハジマノボタンとムニンノボタンとの比較。

		ハハジマノボタン <i>M. tetramerum</i> var. <i>pentapetalum</i>	ムニンノボタン var. <i>tetramerum</i>
生育環境		山頂、稜線に近い裸地～疎林地 土壤やや湿性で深い	山地林、緩傾斜地、疎林内 土壤やや浅くてやや乾燥地
樹形等		株立ち～1本立ち、樹高1.5~2.0m, 大きいもの4~5m、樹勢旺盛	株立ち、樹高0.5~1.0m、樹勢劣勢
葉の形態	葉形	ムニンノボタンより細長、楕円形で 小形	長楕円形だがハハジマノボタンの ものより広めのもの多い
	葉頭	先のとがりはムニンノボタンより鋭い	鋭頭
	葉脚	葉脚もムニンノボタンより鋭いもの 多い	鋭脚～鈍脚
	縁辺	全縁、縁毛はやや荒く剛毛化したもの のあり	全縁、縁毛は密にあるがやわらか
	葉質	やや厚味があって堅質	ハハジマノボタンよりうすくて軟性
毛の多少 と性質		若枝・花柄・葉柄・萼・葉縁・葉脈 上に剛毛有り、葉面上の細毛やや 粗で剛毛化	若枝・花柄・葉柄・葉脈・葉縁に ハハジマノボタンより柔かい剛 毛有り、葉面上の細毛密でやわ らかい
花の形態等	花色	淡桃色	白色～乳白色
	花径	径4.0~5.0cm	3.0~3.5cm
	花弁	5枚	4枚
	雄蕊	長短5本ずつ	長短4本ずつ
	花期	6月下旬～7月上旬	8月下旬～9月上旬
果実等	萼頭	5角形	4角形
	果実	球状（やや楕円）、径2cm	球形、径1.0~1.5cm

月に開花し淡桃色の5弁花をもち、花径は大きく5cm程度のものであった(図1)。これは父島のムニンノボタンの記載と一致しない。このため、戦前父島に自生していたムニンノボタンの再発見につとめ、戦後母島で発見されたものとの形態の差異を明確にすることと、母島のものは花弁がすべて5枚であるのかを確認することとした。

1968年から1970年にかけて父島に在島していた筆者は、中央山から初寝山にかけての台地状の地域を精査したところ、1969年の12月、中央山東側の道路沿いで、リュウキュウマツとヒメツバキの幼木に埋れていた、ムニンノボタンの小株を2株程みつけた。周りの被圧木を伐開しておいたところ、再発見後4年目の1973年9月初旬、数個の着花を見た。花は白色の4弁花で、花径4cm程度、樹高は1mに満たない株状の小低木であり、早田氏の命名されたムニンノボタンの記載とぴったり一致するものであった。さらにその後の調査によって、旧武田牧場附近において1株が確認された。周囲の枝条を伐開しておいたところ、4年程過ぎた1979年の8月下旬になって、数個の開花をみた。この株の花も前の株のものと同様、白色の4枚の花弁をもった花径3~4cmのものであり、樹高も1m程度で、全体にやや柔らかい毛が密生している。

ノボタン属の花の花弁数は変化しやすいといわれるが、母島では、乳房山南方の小ピークと、堺岳から石門山への稜線で自生地が見つかったが、花弁はすべて5枚で、4弁のものや6~7弁のものは全くなかった。母島産と父島産のものを比較してみると、表1のような差異が認められ、明らかな違いがあるのでムニンノボタンの変種、ハハジマノボタンと名づけて報告する。この他、北硫黄島に自生しているノボタン属の植物は、琉球に分布するものと同一種のノボタン(*Melastoma candidum* D. Don)であると報告されている(小野幹雄・小林純子、小笠原諸島自然環境現況調査報告書、1982)。なお、戦前兄島において自生の記録があるが、これまでの数回行われた調査によってはまだ発見されていない。

***Melastoma tetramerum* Hayata var. *pentapetalum* Toyoda, var. nov.**

Planta 1.5~2 m alta. Flores 4~5 cm diam., pentapetali, lilacini. Stamina 10. Capsula ca 2 cm diam.

Hab. Isls. Ogasawara, Hahajima, Chibusayama, 400 m alt., in sunny herbages (T. Toyoda s.n., July 15, 1969, type in TI). (国立林業試験場実験林室)

□Moore, D. M.: *Flora Europaea: checklist and chromosome index* 423 pp. 1982. Cambridge University Press, Cambridge. ¥17,670. これは *Flora Europaea* の最後の巻として発行されたものであって、全植物(シダ植物以上の全管束植物)のリストである。と同時に全欧洲からリポートされた植物の染色体数がその産地と原記載をこめて記載してある。たとえば *Epipactis helleborine* (L.) Crantz では Skalińska et al.